

～ 国際研究 ～

「中央アジア比較法制研究セミナー」特別案件調査団

国際協力部教官

杉山典子

1 はじめに

国際協力部では、2008年度から3年間の予定で、JICA大阪国際センターと協力して、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタンの4か国を対象として、「中央アジア諸国における企業法制」をテーマとする地域別研修「中央アジア比較法制研究セミナー」¹を実施することとしている。中央アジア4か国を対象とする研修を当部が実施するのは初めてであることから、実施に先立ち、現地の実情を調査するとともに、これまで接触を持ったことのない機関も対象としていることから、本セミナー実施への協力を依頼するため、同年9月9日から27日の間、対象国の関連機関を訪問した²。

調査団は、私のほか、元ウズベキスタン長期専門家の松嶋希会弁護士（カザフスタンのみ参加）、JICA大阪の瀬尾佑香氏、JICEの大橋千加子氏（ロシア語通訳担当）³である。

なお、限られた日程で多くの関連機関を訪問する必要があるが、かつ、国際協力部として訪問するのは初めてという機関がほとんどであったことから、訪問先では、国際協力部の活動及び本セミナーの紹介が中心とならざるを得なかった。そのため、本稿は、「調査報告」というよりは、中央アジア地域の見聞録として、気軽にお読みいただければ幸いである。

2 日本からウズベキスタンへ

日本から、韓国（仁川空港）経由でウズベキスタンの首都タシュケントまで、飛行機に乗っている時間自体は約9時間30分である。「シルクロードの国」ということで、日本人観光客にも人気らしく、飛行機でも周りは明らかに日本人が多く、日本語も通じた。しかし、税関では、検査官の女性にロシア語で何か言われて、さっぱりわからない。外国人相手に英語を使ってくれる気もないらしい（英語で言われても、わかっ

¹立ち上げの経緯及び第1回「中央アジア比較法制研究セミナー」（2008年12月10日～19日実施）につき、本号60ページ以下参照。

²4か国すべてを訪問予定であったが、2008年8月24日にキルギスで発生した航空機墜落事故の影響で、キルギス→タジキスタンの移動が困難となり、タジキスタンのみ訪問できなかった。

³中央アジア4か国は、旧ソ連邦の崩壊に伴い、独立した国であるため、それぞれの国に現地語も存在するが、公用語としてロシア語も使用されている。

たかどうかは自信がないが)。スーツケースを開けて調べられた結果、お土産として持ってきた彫金が、金属の固まりに見えて引っかけたらしく、一つ包装を開けて見せ、ようやく納得いただいたが、ロシア語圏に来たことを思い知らされた瞬間であった。

3 ウズベキスタン

ウズベキスタンでは、JICA 事務所、最高経済裁判所、司法省、国有資産管理委員会、日本大使館、非独占化委員会、対外経済関係・投資・商業省を訪問した。

(1) JICA ウズベキスタン事務所

タシュケントの町中の建物は、それぞれ趣向を凝らした目を引くデザインの建物が多かったが、JICA 事務所のあるビジネスセンターは、普通に近代的なビルであった。外国人が借りられる建物は、数少ないらしい。ここでは、桑原直子法整備支援専門家（名古屋大学のインターン生 2 名も同席）から、現地での活動経験を踏まえて、援助窓口のこと、年齢制限や面談の必要性など、いろいろなアドバイスをいただいた。ちなみに、同席した 6 名全員が女性であり、これもまた、数少ない経験であった。

(2) 最高経済裁判所

エレベーターが壊れているとのことで、5 階まで階段で上がったが、エレベーターに乗れば乗ったで危険らしい。倒産法注釈書プロジェクト¹でのつながりもあり、セミナーへの協力は確約いただけたが、候補者 2 名との面談では、こちらの意図した回答がなかなか得られず、最初の洗礼を味わうこととなった。しかし、二人目になると、少しは彼らの発想の理由もわかったように思え、その意味では、意義ある面談だったと思う。

(3) 司法省

ここでも、セミナーの説明をして、（具体的要望は何もないながらも）今後も協力していきましようかと笑顔で固い握手を交わしたが、候補者との面談では、倒産の事例を問題にしているのに「借りたものは返さないといけない。」という回答から離れず、為す術もなかった。「契約の不履行」が司法省における喫緊の課題であるということはよくわかったが。



¹ ウズベキスタン倒産法注釈書プロジェクトについては、本誌第 32 号 10 ページ以下参照。

(4) 国有資産管理委員会

援助窓口である対外経済関係・投資・商業省の優先順位から漏れたため、今年度は本セミナーに対する応募はなかったと聞いていた。先方からは、「自分たちはコーポレートガバナンスの専門家であるにもかかわらず本セミナーの募集要項（GI）が届いていなかった」として、冒頭から険悪になりかけたが、我々としては募集要項に国有資産管理委員会を明記していること、それにもかかわらず候補者を出してもらえなかったのだからこうやって説明にやってきたことを伝え、一応の理解を得られた。



(5) 非独占化委員会

先方は、古い歴史を持つ日本の倒産法を学ぶことが効果的と考えており、倒産法の改正に対応した「ウズベキスタン倒産法注釈書」の修正プロジェクトを要望しているとのことであった。「ウズベキスタン倒産法注釈書」は、法律家、企業家、学生等、すべての分野の人にとって非常に有益なものであったが、本セミナーは、学者等のアカデミックな関心しか呼ばないのではないかと、かなり否定的な見解を示されて、心が折れそうになった。しかし、最後には、本セミナーの応募期間中に海外出張の許可を出す担当者が業務出張で不在であったため、今からでもセミナーに応募したいとのことであり、完全に否定されているものでもなさそうである。



(6) 本屋

最高経済裁判所の建物1階のキオスク、ホテルに戻る途中の本屋（看板に“法律書”と書いてある。）、司法省の隣の建物の本屋、はす向かいの建物の本屋、すぐ近くのタシュケント法科大学院の本屋を回った。ここで売られているのは、法律の条文（ロシア語＋ウズベク語併記）がほとんどであった。注釈書としては、倒産法注釈書プロジェクトで作成した注釈書、タシュケント法科大学院が作成したと思われる刑法の注釈書（総論・各論のセット）、憲法の注釈書のいずれか1冊があるかないかであった。タシュケント法科大学院の本屋では、企業のための経済法の教科書（コンメンタールではなくてテキスト）があると言われたが、ウズベク語で書かれていると

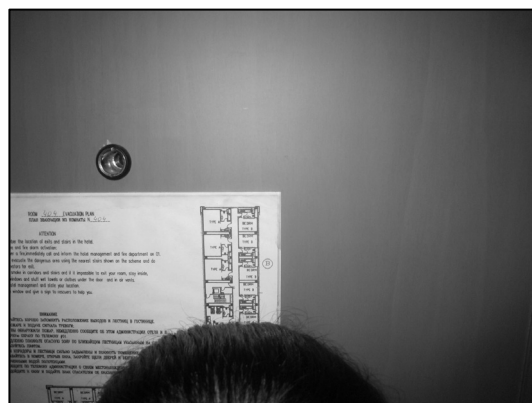


法律の条文集は緑色の表紙に統一されている。

のことで、翻訳の問題から購入を断念した。

(7) 現地での生活

ホテルは、今回の訪問国の中では唯一、直接日本円から現地通貨のスムに両替できた。また、自室で自由にインターネットが使える、湯船もあり、朝食（バイキング）のメニューも豊富で、おいしく、今回の訪問国の中で最も快適であったが、ドアスコープが信じられないくらい高い位置にあり、どんなに背伸びしても届かなかったことだけが、困ったことであった（部屋にいるときに掃除に来たりするのだ）。

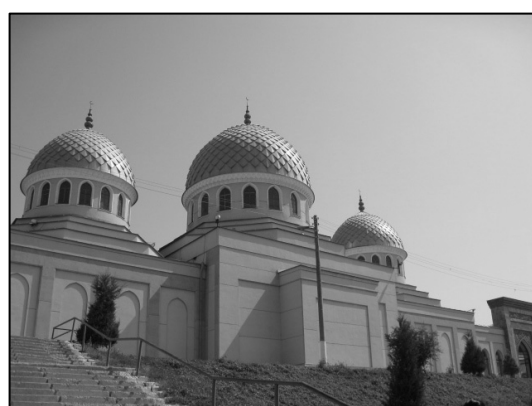


ホテルのドア。下に写っているのが私の頭。届く気がしない。

ここでは、1,000 スム札が一番の高額紙幣なので、1万円を両替したら、1,000 スム札が121枚出てきた。幾ら物価が安いといっても、食事代に何十枚という札を出すこともあり、数えるのも持ち歩くのも大変である。現地事務所の人の話では、パソコンを買うのに、クレジットカードが使えず、1,000 スム札2,000枚を袋に詰めて持っていったことがあるらしい。逆に小額紙幣は流通しておらず、水のペットボトル（430スム）を買おうと200スム札3枚を出したら、1枚返された。100スム未満は勝手に四捨五入されるらしい。他の店では水のペットボトル（350スム）に200スム札2枚を出したら、おつり代わりにガムをくれた。

食事は、ラグマン、プロフ、ウズベキスタンマントウ、シャシリク、サムサなどのウズベキスタン料理を一通り味わったほか、イタリア料理や韓国料理にも行った。メニューは、羊肉、鶏肉、馬肉、牛肉と肉の種類別に分かれていることが多い（当然豚肉のページはない。）。人生の中でこんなにいろいろな種類の肉を食べること、そして、これだけ羊肉を食べることは、もうないであろう。また、イタリア料理屋ではメニューに豚のマークがついていた。イスラム教への配慮であろう。ただし、訪問時はラマダン（断食月）期間中であったが、そのことは、全く感じられなかった。

休日には、地下鉄でチョルスバザールへ行った。地下鉄のホームは少し暗いが、照明は豪華で、写真を撮りたい衝動に駆られる。しかし、地下鉄は写真撮影禁止とのことで、ホームに警察官らしき人もいたのであきらめた。途中の駅もレリーフが飾られていたり、天井にタイルが飾られていたり、柱や照明も一駅ごとに趣が違っていた。電



車の中は、つり革、窓上、ドア横、ドアに広告がある。市場経済化されるまでは、なかったことらしい。電車を乗り換えたら、今度はつり革自体がない。もしかしたら、つり革広告を出した会社がつり革自体も提供したのだろうか、と勝手に想像してみた。なお、町中も含めて、見かける広告はインターネット関連と携帯電話ばかりであり、「広告」という手段は、それほどには根付いていないのかもしれない。



バザールの入り口付近は、スーツ、靴、民族衣装まで様々な衣類のゾーン。果物が見たくて、道を聞こうとするが、緑の制服の警察官は、日本のお巡りさんと違って、気軽に道案内はしてくれないだろう。暑いですが、人でごった返しているのに、日傘も差せない。イスラム風のスカーフをかぶっている人がうらやましい。イスラム女性は肌を隠すものだろうが、ものすごいミニスカ

ートの女性もいる。ドームに向かうテントは野菜や果物、ドームの中はチーズや穀物が並んでいる。見たことないものばかりで、見ているだけでも面白かった。

町では、黒い日傘や日本語の表紙のガイドブックを持っていなければ、外国人とも思われぬようだ。治安を心配していたが、夜中に一人で出歩かない限り、危険はないそうだ。そしてもう一つ、信号のない、しかもかなり広い道路をタイミングを見計らって渡らねばならないことを除けば。ウズベキスタンは、ソ連時代にインフラ整備がされたとのことで、やたらと道路が広い。夏は全く雨が降らないらしいのに、街路樹が続いている。スプリンクラーで水をやるにしても、気候とあっていない。やたらと噴水もある。どこから水が来るのだろうか。

4 ウズベキスタンから、カザフスタン（アスタナ）へ

タシュケント空港は、出国の入り口が2階にあり、2階に上る車道もあるが、1階地点で車を降りなければならない。大統領以外は2階への車道を使えないらしい。エレベーターはなく、スーツケースを持って階段を上らないといけない。幸いドライバーさんが3人分のスーツケースを運んでくれたが、20キロ以上するスーツケースを両手に一つずつ持って階段を上る背中を見ると、この地域が、格闘技に強いということも妙に納得できる。一人ではどうすることもできなかつただろう。

待合室から見えている飛行機の窓の数の割に、ここにいる乗客は少ない気がする。その向こうに更に小さい飛行機が見えているが、本当に小さいのか、遠近法の問題かはわからない。アナウンスが入り、ぞろぞろと「出発出口」と書かれた階段を下りようとする、なぜか上ってくる人がいる。到着と出発で同じ階段を使うのかと思ったら、先に行く人たちの表情が変。大橋さんがロシア語で何か聞いたら、全員かなり微妙な苦笑いになった。どうやら階段の下は行き止まりで、誰にも出口が分からないら

しい。みんなで引き返したけど、係員も誰もいない。しばらく待たされて、ようやく通路を二人連れの係員らしき人がやってくる。待たされたことに誰も文句を言わないところを見ると、よくあることなのだろう。搭乗券を確認して半券を返され（手動）、バスで移動する。まず、窓から見えていた飛行機を通り過ぎる。次に、少し小さい飛行機が見えるが、それも通り過ぎる。更に小さい飛行機がある。幾ら何でも小さすぎるだろうとドキドキしていると、それも通り過ぎる。結局、2番目に見た中くらいの飛行機のところで止まった。通常からすればかなり小さい飛行機だが、わざわざ遠回りしてもっと小さい飛行機を見せられているので、ましな気がする。座席はちょうど翼の所だったが、翼は、何と窓の上にある。飛行機に乗って、翼が窓の上に見えるというのも今まで経験したことがないが、翼が邪魔しないので、外の景色はよく見える。市内にいと緑が多いと思ったが、上から見る風景はやはり茶色かった。しばらくは建物が整然と並んでいたが、そのうち完全な砂地になり、しかも地面にひび割れがあるようにも見える。それだけ乾いているのだろう。着陸態勢に入って、雲の中でかなり揺れて、緊張したが、周りには携帯電話を使っている人が少なくとも二人はいた。許されているのだろうか。何とか無事に着陸したが、まさに生き延びた気分だった。

5 カザフスタン（アスタナ）

アスタナ（現首都）では、JICA 事務所、最高裁判所、司法省、経済予算計画省、日本大使館を訪問した。

(1) 最高裁判所

かなり強烈な女性の裁判官にセミナーの説明をしたが、先方からは、いかに自分がいろいろなセミナーを手がけているか、自分がこのセミナーの講師になりたかったということを語られてしまった。ウズベキスタンの司法省でも同じタイプの女性がいたが、旧ソ連時代から生き抜いている女は強いということだろうか（日本でいえば、「明治の女は強い」みたいな。）。今回のセミナーは、25歳から35歳という年齢制限を設けていたにもかかわらず、カザフスタンは40代、50代の候補者を出してきていたのは、研修員としてではなく、講師としてということだったのかもしれない。カザフスタンは「大国意識」が強いと聞いていたが、まさに「支援をする側」という意識を感じた。



玄関前に正義の女神の像がある。



(2) 司法省

やたらと若い人が会議室に入ってきたと思ったら、その人が副大臣だった。欧州



委員会や USAID と様々なプロジェクトを行っているとのことであり、日本との「協力」経験がないことを残念に思っているとのことであった。副大臣はイギリス留学帰りとのことで、外国の知恵を取り入れることに抵抗がないのであろう。それまでは、留学させたら自国には戻ってこないことが多かったようだが、国費で若者を留学させる計画もあるとのことである。カザフスタ

ンという国は、「支援」を受ける気はないと聞いていたが、外国に対して開かれていないわけではないようだ（もちろん「支援」ではなく「協力」という前提であるが。）。むしろ、中央アジアのリーダーとして、自分たちが積極的に外国の知恵を取り入れ、他の国にも広めていこうという感じがする。また、「日本法」に興味はないと聞いていたが、「世界一安全な国、日本」「経済発展している国、日本」という評価はあるようであった（今回のセミナーのテーマには結びつかないが。）。

(3) 現地での生活

アスタナは、国際コンペで1位に選ばれた日本の某有名建築家の都市計画案に基づき開発された都市とのことである。空港付近には、見渡す限り何もないが、突如として町が出現する。とにかく奇抜で金色の建物が多い。ディズニーランドにでも来た気分になる。夜になると、街路樹が下から緑色のライトアップがされている。ショッピングセンターの駐車場の噴水もきれいにライトアップされている。その向かいの建物の屋上からレーザー光線のようなものが出ていて、屋上の国旗が光って見える。天気が悪かったり、夜間モードがうまく使えなかったりして、いい写真を撮れなかったのが残念である。ウズベキスタンが痛いくらいに日差しが強かったのに比べて、アスタナは雨ばかりで、凍えるほど寒い。

ホテルでは、当然ながら日本円は使えないので、200ドルを両替して、23,200 テンゲになった。ここでの感覚は日本とほぼ同じらしい。廊下のソファとかは、かなり豪華だが、湯船はなく、シャワーは本気で狭い。ここでは、ベッドルームの広さに関心はあっても、バ



左の円柱の建物はすべて金色



バスルームはこの幅だけ・・・

スルूमの広さには全く関心はないらしい。何だか警報音が鳴っていると思ったら、立て付けが悪くて、ドアがきちんとしていなかった。オートロックと思って安心していると、痛い目に遭いそうだ。気付くとクローゼットも開いている。閉め忘れたのかと思ったが、これも立て付けのせいらしい。フワァ〜と勝手に扉が開く様子は、亡霊でも出てきそうで、結構怖かった。

6 アスタナからアルマティへ

アスタナ空港にはエスカレーターがあった。それだけで有り難いと思える。飛行機は、両側3列で通路は狭いが、シートが多少はゆったりして、クッションもいい。シートベルト着用サインが消えたら、頭上からモニターが降りてきて、日本でいうどつきカメラみたいな映像が流れ始めた。言葉が分からなくても十分笑える。こういう部分がウズベキスタンとカザフスタンの違いなのだろうか。着陸時はかなりの揺れだったが、機体が新しいと安心感が全く違う。

無事到着し、荷物とも巡り会って、外に出ると、「タクシー、タクシー」と大勢にいきなり囲まれる。事前に聞いてはいたが、すごい勢いで驚いた。

7 カザフスタン（アルマティ）

アルマティ（旧首都）では、IFC、欧州委員会、USAID を訪問した。本屋も回ったが、付録かと思うような薄い条文集や、個人の論文集が主であり、それ以外はロシアの本をそのまま輸入している。注釈書のようなものはない。

アルマティは、1997年にアスタナに遷都されるまでの首都であり、作り物の町みたいなアスタナに比べて、24時間スーパーや屋台もあり、人の住む町らしい活気がある。バスは韓国車ばかり見かけたが、一般の車は日本車を多く見かける。中央バザールは、ドームが一つだけしかない。ドライフルーツ、果物、キムチ、肉などのゾーンに分かれて、大きな案内が、上からぶら下がっている。写真禁止の看板も大きく出ている。2階は単にその様子を眺められるだけで何も無い。広いので、迷ったときに目的の場所を確かめるためかもしれない。地下にも食べ物を売っていて、ドームの中とは場所代が違うらしい。

食事は、カザフスタン料理（ビシュマルバク、アルマティマントウ、バルサッキ）、グルジア料理（ハチャプリ、ヒンカリ）、ロシア料理（ジュリアン、ペリメニ）、トルコ料理などを味わった。ウズベキスタンでは、メニューに肉のページしかなかったが、カザフスタンでは魚料理のページもあった。ただし、とても高かったが。

8 カザフスタンからキルギスへ

カザフスタンからキルギスの首都ビシュケクまでは車で4時間の旅である。北海道以上の大草原が延々と続く。時々牛の放牧らしきものを見かけるが、ほとんど景色に変化はない。途中のドライブインで昼食を取った後トイレに行く。入り口でおばさんに20テング払って紙をもらわないと入れないらしい。それなりにきれいなトイレでちょっと安心した。そこからまた長い旅。山を越えて、建物らしきものが増えたと思ったら、国境の町に着いた。税関は、車のトランクを開けて荷物を見ただけで終わった。キルギス人のドライバーさんは、手続が不要らしく、私たちだけ出国手続をする建物に入る。確かに、「ちょっと買物に行ってきました。」といった感じで果物等を抱えている人が多く、いちいちパスポートに記入していたら、きりがないであろう。パソコンの調子が悪かったのか、やけに時間がかかって心配したが、何事もなく通過できた。また車に乗って川を越える。ここが国境らしい。あっさり国境を越えてしまった。次はキルギスの入国手続。また車のトランクを開けて荷物を見せて、手続をする建物へ入る。他の人はどんどん入国していくのに、私たちは日本人かと聞かれて、事務所みたいな所にパスポートを持って行き、外で延々待たされる。何を調べたのかよく分からないが、パスポートを返されて無事通過できた。



9 キルギス

キルギスでは、JICA 事務所、最高裁判所、ビシュケク市広域裁判所、チュイ州広域裁判所、司法省、国有資産管理委員会、日本大使館、商工会議所を訪問した。

(1) 最高裁判所

裁判官になるには、5年以上の法律関係の職務経験が必要であるため、地方裁判所の裁判官は30歳以上であり、最高裁判所の

裁判官は、地方裁判所での5年以上の勤務を経る必要があるため、35歳以上となることとなった。このことから、今回のセミナーには、年齢制限により参加できないだろうということで、募集要項が送られていなかったらしく、セミナー及びその成果物出版への協力については、かなり難色を示されてしまった。

また、法律に関するセミナーでは、キルギス最高裁判所の裁判官が講師となることが有益と考えており、外国からの講師派遣が必要な場合も、旧ソ連の専門家の参加がよいとのこと、外国人に対する警戒心が感じられた。



(2) ビシュケク市広域裁判所

女性の所長にセミナーの説明をしたが、所長自身が、いろいろな国への留学、研修、講師派遣の経験があるようで、とにかく話がとぎれない。そして通訳のタイミングも取ってくれないから、話がどこに向かっているのかもわからない。何とか制して通訳をしてもらい、その通訳の終わらないうちにこちらの言いたいことを話し始めないと必要な依頼もできなそうであった。ウズベキスタンの司法省、カザフスタンの最高裁判所でも会ったような、ソ連時代をたくましく生き抜いた年代の女性の特徴なのだろうか。今回のセミナーに自分が行きたかったとのことで、年齢制限は不満といわれてしまったことも、前の二人と共通している。



ビシュケク市広域裁判所，チュイ州広域裁判所，司法省が同じ建物に入っている。

(3) 司法省

日本の法務省の人間が訪問するというので、副大臣が対応してくださったが（大臣は直前に更迭されて後任者が決まっていなかった。）、今回のセミナーにも応募はなく、私たちの訪問に対し、先方も戸惑っていたようである。また、国によって法律が違うので、法律の専門家はその国の中でしか専門家ではないと思うとのことで、ここでも外国人に対する警戒心が感じられた。

なお、司法省のシンボルマークは、左手に剣、右手は何を持っているのかよくわからない、男性が描かれている。右手に剣、左手に天びんであれば、正義の女神であるが、ここでは、イスラム教が強いため、正義の「女神」などは存在しないということだろうか？カザフスタンの最高裁判所の正面玄関には、大きな正義の女神の像が飾られていたが、ウズベキスタンでは、確かに見かけなかった。カザフスタンが最もイスラム色が薄いと聞いていたが、こういう所にも表れているのだろうか。



(4) 国有資産管理委員会

倒産部長は、2006年、JICA本部とJICA-NETで「破産法セミナー」に参加した



らしく、JICA の活動にも非常に好意的であった。同席した倒産部副部長兼法務部長の女性は、非常にそう明な印象であったが、年齢制限のために応募できなかったとのことで残念であった。

キルギスは、独立したばかりの若い国であり、急に株式会社や有限会社が設立されたため、企業経営に慣れていない経営者による破産が多かったので、倒産部が設立された。できるだけ多くの企業を再生したいし、援助しなければいけないので、日本の企業再生に係る取り組みや、きめ細かい中小企業支援に興味があるとのことであった。倒産部長自身も、「国際機関とコンタクトを取るようになったばかり」と言っていたが、最高裁判所や司法省で感じた外国人に対する警戒心も、国民性ではなく、単に経験の問題なのだろうと思われる。

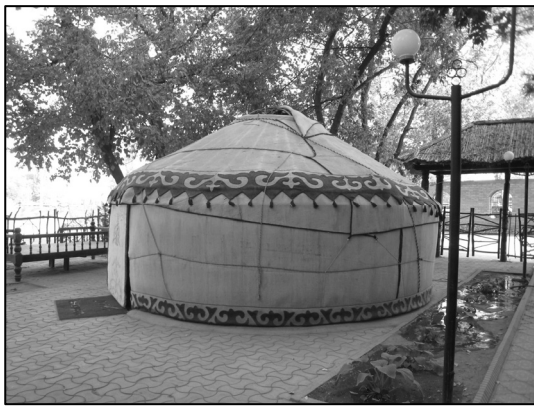
(5) 本屋

いくつかの本屋を回ったが、注釈書のようなものはなかった。ウェブサイト (www.tokutom.com) で条文が手に入るということ、裁判所、商工会議所、外国ドナーから紹介された。ただし、1月100ドルの利用料が必要だと聞かされたと記憶している。そのサイトで仕入れた情報を更に提供している会社もあった。

(6) 現地での生活

日本人とキルギス人は顔が似ている。JICA 事務所で日本語で話しかけられ、顔も日本人だったので、てっきり日本人だと思っていたら、現地スタッフだったこともある。モンゴル付近に住んでいた人のうち、魚を求めて東に行ったのが日本人、肉を求めて西に行ったのがキルギス人だと言われているらしい。日本でこの話を知っている人は数少ないだろうが（そもそもキルギスの位置を知っている人も少ないだろうが）、キルギス人は大抵知っていることらしい。今回の訪問先でも、いくつかの機関では JICA の帰国研修員が同席してくれたが、日本語が堪能な人が多い。キルギスには日系企業が少ないので、日本語ができて就職先はないらしいが、それでも、日本語の学習者が多いらしい。実はドライバーさんも日本語が少し話せるとのことだった。自分の知らないところで、こんなに親日的な国があるのかと、とても驚いたし、うれししかった。

ホテルは、民家のような建物で、部屋は無駄に広い。水力発電のキルギスは、水不足による電力不足で、地域ごとに毎日、一定時間停電するとのことであったが、ホテルは（学校や病院も）、幸い除外されているとのことだった。ただし、コンセントは2か所あっても1か所しか使えず、電気スタンドを点けるか、パソコンを使うか、携帯電話の充電をするか、どれか一つしかできない。私の部屋だけ1階で、それほど寒さも厳しくなかったが、ヒーターを使おうと思ったら、それだけでコンセントをふさいでしまうことになる。ホテルにレストランはなく、朝食のみしか出ないので、昼と夜は外で食べざるを得ないが、夕食の帰り道は街灯が点いておらず、大橋さんが懐中電灯を持ってきていなかったら、大変なことになっていた。



中央アジア料理の店の前のユルタ。もちろん飾り。ユルタはキルギスの国旗にもデザインされている。

出張も3週間目となると、くじけて日本料理に2回行き、中華料理、韓国料理、ファーストフードに逃げてしまったが、ウクライナ料理やトルコ料理も味わった。レバノン料理の店にも興味があったが、だれも行ったことがないというのでやめておいた。最後にはまた、中央アジア料理（プロフ、マントウ、ビシュバルマク、アシュラフ）を食べに行った。なお、ドライバーさんと案内してくれたナショナルスタッフは、ラマダン中とのことで、食事に案内して

くれても自分は食事をしない。タジキスタン以外の国は、イスラム教がそんなに厳しくないと思っていたが、今回の出張で、ラマダンをしている人に会ったのは、キルギスだけである。

10 キルギスから日本へ

まずはキルギスからトルコへ6時間の旅。ビシュケク空港では、「カメラを4台持っているのか？」と言って止められてしまった。一つのバックに携帯電話2個とデジカメ2個（それぞれ国際協力部の物と個人の物）を入れていたせいで、怪しまれたらしい。中央アジアでは、携帯電話の持込みが制限されていると聞いたようにも思うが、行商でもするように見えたのだろうか。次の手荷物検査では、パソコンの電源を入れるように指示された。画面を見せたらそれですんだが、一度電源を入れたら、簡単には落とせない。何のために電源を入れさせるのだろうか。単に機種に興味があるだけの噂もあるが。

トルコのイスタンブールでは、トランジットに17時間もあるので、航空会社の用意したホテルに入った後、イスタンブールの町を散策する。ここは、アジアとヨーロッパの境界線の町である。お土産を買おうと思ったら、トルコ・リラの次にユーロで値段を言われるあたりは、一応ヨーロッパらしい(EUには加盟できていないそうだが)。かなり適当なレートに思えるが、もちろん、ドルも使える。中央アジアでは、華やかなスカーフを被っている女性を見かけていたが、イスタンブールでは、全身黒づくめで目しか出ていない女性を何人も見かけた。これが本当のイスラム教徒なのだろう。また、中央アジアにいたころは、バザールを歩いているだけでも、そんなに話しかけられることはなかったが、ここでは、やたらと日本語で話しかけられる（「薄利多売」が流行語らしい。）。ただ、観光の国だけあって、人々はとても親切で、立ち止まって地図を眺めていたら、いつも地元の人が話しかけて、道案内をしてくれた。最初は、「何か売りつけられるのではないかと身構えたりしていたが、純粋に親切心だけで話しかけてくれるようだったので、そのうち、道に迷ったら、人に見えるように地図を

広げるようになった。

次にトルコから北京へ9時間の旅。普通は、出発時刻の30分前に搭乗開始だが、なぜか1時間前に搭乗開始となっている。ちゃんと1時間前に並んだのに、全く列が動かない。立ったまま散々待たされた挙げ句にようやく動き始めたと思ったら、進みがやけに遅い。金属探知器は通っていたのに、また全員の手荷物を開けてチェックが始まったのだ。長蛇の列に対し、係員は4人。空いた係員の所に行こうとしたら止められた。荷物の中を見るので、女性客は女性係員の担当らしい。チェックの後は、さすがに待合室で座って待てたが、出発時刻を過ぎても終わりそうにない。今回の出張で飛行機に乗るのは、6回目だったが、一番厳しい検査だった。心配していたとおり、結局45分遅れで出発したが、もともとトランジットに1時間しかなかったので、北京空港についた時は、次の出発時刻の直前。間に合わないかと思ったが、パソコン入りの手荷物を抱えて、ひたすら空港内を走らされることとなった。しかも、時間がないのに、手荷物検査は結構厳しい。やっと飛行機に乗り込んだときは、へとへとだった。

結局、トルコで預けた荷物は一日遅れたが、体は予定どおりに自宅に帰ることができた。

11 終わりに

本稿だけでは、楽しい旅に思われるかもしれないが、残暑の日本からしゃく熱のウズベキスタンへ、凍えるカザフスタンのアスタナへ、温暖なカザフスタンのアルマティへ、高地で冷えるキルギスへ、また暑いトルコへと約3週間で様々な気候を体験した。また、日本との時差はそれぞれ、ウズベキスタンは4時間、カザフスタンとキルギスは3時間、トルコは6時間である（帰国後が一番大変だったが）。言葉の違いだけではなく、そもそもの考え方の違いから言いたいことも理解してもらえず、苦しむこともあった。

このような苦難を共に乗り越えた本調査団メンバーである松嶋希会弁護士、瀬尾佑香氏、大橋千加子氏には、調査に御尽力いただくとともに、語学の苦手な私のために公私にわたり御助力いただき、また、体調不良により心配もおかけした。各国のJICA現地事務所の皆様にも多大な御協力をいただいた。この場をお借りして、心から感謝申し上げたい。

この旅で、中央アジアの文化、人々の気質、考え方を自分の目と耳で見聞きした経験を中央アジア比較法制研究セミナーの円滑な実施に活かしていきたい。



「中央アジア比較法制研究セミナー」とは関係ないが、番外編として

なお、本稿では、異文化交流的な要素のみを採り上げているが、関係機関に対するセミナーの協力依頼、セミナー参加候補者との面談、ニーズ調査などの業務もきちんと行っていたということ、及び内容はあくまで個人の勝手な想像や感想であることを、誤解のないように申し添えたい。